

私

たちに相談してくる人々は様々な悩みを持って解決への糸口を求めてくる。気軽に相談を、と呼びかけていても、実際は万策尽きて藁にもすがる思いで連絡してくる。緊張と焦りから、複雑な背景を語り、こじれた状態でどうにもならないことを打ち明ける。それでも多くの場合、一番困っている問題は何なのかを語ってもらい、具体的なテーマを明確にしながら取り組んでいる。カウンセリング現場では「主訴」と呼んでいる。

流通業の会社に入社して2年のK子さんからまず電話で相談を受けたケースは、その主訴にとらわれて本題を把握するまでに時間がかかった一例と言える。父親との確執、父と母の激しい夫婦喧嘩などを話した。まずテーマをひとつに絞りました。まずテーマをひとつ、K子さんは「父親からの暴力に耐えられない」と語った。これを主訴と位置づけたのだが、家庭崩壊寸前までに至っていた家族間の深いミゾの背景には、父親のパチンコ依存状態が重くのしかかっていた。

# パチンコ依存

第7回

相談現場からの報告

柏木 勇一

産業カウンセラー・家族相談士

## 父がのめり込み家族の崩壊へ 食い止めたのは娘さんの思い

娘さんから必死の相談  
夫婦喧嘩に父親の暴力

電話はこんな話し合いからスタートした。

「いま困っていることはどんなことですか」

「なんだかもう家の中がめっちゃくちゃで、仕事にも身が入らなくてどうしたらいいか分からなくなっています」

「ご家族は」

「会社員の父とスーパーでパート勤めの母にわたしです。3歳上の兄も就職していますが勤務先が自宅からは通えない距離なので一人暮らしをしています。忙しいのかあまり自宅には帰ってきません」

「家の中がめっちゃくちゃというのは？」

「ええ、家に帰っても毎日両親が喧嘩ばかりして……口喧嘩だけではなく、まだいいのですが、父からは手当たり次第に物が投げられて、母もそれに対抗する有様です」

「お母さんも何か投げてるんですか」

「ええ。家具やふすま、たたみも傷だらけで。やめて、と叫ぶと父はわたしにまで手を出すんです。毎日がこんな状態で会社でも仕事



に集中できません。ひとり暮らしをしたのですが給料が安くてちよつと無理です。それに……」

「それに？」

「両親だけになったら母がどうなるか心配で」

「お父さんとお母さんは昔から喧嘩していたのかな。何か原因があつて急に仲が悪くなったとか……」

「そういえば5年ぐらい前までは普通だったような気がします。そうです。この5年で父親の態度がガラツと変わりました。休みは会社の仲間とゴルフにも行っていたのに」

「ゴルフにも行かなくなった？」

「ええ、どうしたんでしょうね。」

いまお話を聞いて気がつきました。そういえば……」

「そういえば？」

「5年前といえは兄が大学を卒業して就職した年です。生活も楽になったはずなのに、母がパート勤務を始めたのもその後のような気がします。でも関係ないですよ。母は時間が余って外に出たくなつたのかもしれないし」

## 一方に加担しないよう 気をつけて相談にのる

何となく気になりつつも、初回

の電話はそれ以上深入りすることは避けた。確かに普通の家族の状態でないが、所詮は夫婦喧嘩で、夫の妻に対する暴力（DV）ドメスティック・バイオレンス」という判断もできかねた。K子さんには、親子関係とはいえ大人同士として少し距離を置き、何よりも自分自身の生活を大事に、家事を手伝いつつも趣味の世界も広げるようアドバイスした。

母親の味方になることは考えられたが、この段階では、一方にだけ加担することは避けることもつけ加えた。

この判断の背景には、5年前から生じたという父親の変化の原因が気になったからだった。原因が家庭にあるのか仕事上の問題なのか、この辺がポイントかもしれないと考えた。いま、3人家族が2対1になってしまうと、父親の行動はさらに悪い方にエスカレートする可能性も排除できなかつた。

K子さんから2度目の電話があったのは2週間後の夕方だった。受話器の向こうの声は泣きながら話していることが分かった。帰宅途中で駅から自宅まで歩く途中の

喫茶店からの携帯電話だった。両親の喧嘩は相変わらずと話した上で、母からの話でショックを受け、いたたまれずに電話したと語った。K子さんは母親に「どうしてお父さんがこんなに荒れるようになったの。何か知っているの？そしてお母さんも相手して対抗するのはなぜ」と聞いた。その時の母親の答えは予想していない内容だった。K子さんは一緒に暮らしていて全く気づいていなかった自分を恥じた。

## 帰宅時間遅く休日も パチンコ通いだつた

父から渡される生活費が半減した。給料明細も見せなくなった。父は休日は朝からパチンコに通っていた。帰宅時間は以前から遅く、その時間には変わりはなかつたので気づかなかつたが、まっすぐ自宅に帰らないで通っていた。兄が家を離れたとはいえ生活は苦しくなり、母は貯金を取り崩しつつパートの仕事を見つけた。父は人が変わったように荒れ始めてちよつとしたことで暴言を吐くようになった。半年前母は、入院して病状が思わしくない実家の母の見舞い

に行つた。遠方なので飛行機を利用した。とたんに父は「いい気なもんだ。高い航空運賃を出して実家に行くとは」と母に怒鳴つた。我慢しきれず母は「あなたこそ何よ。パチンコばかりして。貯金ももうないのよ。いいかげんにしてよ」と応酬した。妻には隠していたことがばれて父は激高した。毎晩のようにパチンコに通っていることも、自暴自棄の態度で語つたという。

母が打ち明けた事実実はK子さんの胸にずしんと響いた。父が休日にパチンコを始めたのは、不審に思った母がこっそり尾行して分かつたことだった。それを知つてK子さんは、あ然とした。時々町で見かける熟年夫婦の姿に憧れのような感情を持ったK子さんにとって、自分の両親の憎しみ合いと、行動まで監視するような姿にただただ悲しくなるばかりだった。

## 離婚をとどまつた母親は 自分の行動に後悔の念も

母は離婚して家を出ることも真剣に考えていた。しかし、父がどう出るのか分からない。別居という選択もあるが、生活していける





かどうか、自信はなかった。離婚という言葉が母から出た時も、K子さんは何も話せなかったという。別れたいという気持ちは分かりすぎるほど分かった。といって自分は何もできない。慰めの言葉も意味はないだろう。ただオロオロするばかりだった。

相談者であるK子さんだけの話し合いで済ませることはできた

が、家庭そのものが破綻しかかっている状態を知ってしまった立場として、父親と接触できないかをまず考えた。そこにつながるために母親と話し合うことはできないか。その橋渡しをK子さんに依頼した。何もできない、というK子さんにとって、いいアドバイスだったのだろう。K子さんが積極的に動いてくれて、さらに2週間後に静かなホテルのラウンジで母子と話し合うことができた。

うつむきながら娘と現れた母からは、夫とのしり合いをするような雰囲気は感じられなかった。ここで確認できたことは、いずれ娘が嫁いだ後のことも考え、離婚はしたくないこと、夫のパチンコも娯楽としてなら構わないということだった。そして何よりも、夫がなぜ変貌してしまったのか知りたい

という。そう話す時の母親は、何かあっても相談されない存在だったことを悔やみ、自分自身がいい妻だったのか、何かあるとすぐ実家に駆け込んでしまっていたことを後悔する言葉が出た。

夫婦間の会話がなくなっていることは世間ではよくあることと通り一遍に判断することは簡単だった。まだ家族内に亀裂が生じてから期間が短いことから、修復はできるのではないかと考えた。父親の職場の連絡先を教えてもらった。中堅メーカー系列の商社が勤務先だった。拒否されることを覚悟して「男と男の話し合い」の場を求めた。

## 不本意な営業内勤に「なんで俺だけが」と

娘のK子さんが両親のことを、特に父親のことをとても心配していることを語って一度会いたいと伝えたところ、こちらが考えていたような拒絶することもなく実現した。「会社近くで、いつでもいいです。どうせ暇ですから」という何か投げやりな言い方が気になった。父親は時々は堰を切ったように話し、家族には語られなかつ

た事実が明らかにになっていった。意外な展開だった。

課長職だが部下はいない。名ばかり管理職、と自嘲気味に語った。以前は営業現場で指揮を取っていたが、担当部門の成績が上がらず昇進もなく営業内勤に。評価も下がり給料も上がらない。これまで頑張ってきたのは何だったのか。

まもなく50歳。成績が不振なのは、親会社が開発品の新製品を開発に遅れを取ったからだ。時代の変化を読み誤ったのはいいだけだ。時代の変化を。何でおれだけが……。同僚からのゴルフの誘いも断わった。苛立ちの行く先がパチンコだった。独身時代から30代の頃までは、顧客回りの空いた時間にちよつと立ち寄りことはあった。遊びと娯楽の対象という考えはちゃんと持っていた。

その考えも頭から消えていた。事務職と同じように定時に職場を離れた。以前なら考えられない早い退社だった。途中駅で下車しパチンコへ。多くの客がいても知り合いとは会わない。そこだけが一人になれる世界だった。それでも用心に用心を重ねた。帰宅途中の駅を何回も変えた。気に入った店があるわけではなかった。ここで



勝とうという意識はなかった。ただ誰からも干渉されない場所がほしかった。スーツ姿で談笑しながら台に向かっている二人連れなどを見ると、仕事が一段落してホッとしているのかな、これから一杯やるのかな、昼間のストレス解消かな、などの想いをめぐらせることもあった。同僚の多くが職場に残っているのに、罪悪感も消えず、自分の姿はどう見えるのだろう、と考える時もあった。それをかき消そうと、何度も玉を買い増すこともあった。

## 中年男の情けない話を聞いてくれてありがとう

いつもの帰宅時間を守ればいいという、父親としての体面を守りたい気持ちが残っていたことは認められるが、もともとが現実からの逃避、逆境に対抗していいこうという前向きな姿勢がなかっただけに、一度快楽にのめりこんでしまうと歯止めはきかなかつた。休日にも通い始めた。午前だけから午後になっても店にいる時間が増えた。とことん負ける日も少なくなかった。ゴルフを断わったのも同僚と接することを避けたかったと同時に

に、お金がなかった。好きな酒も飲まなくなつた。すべてがパチンコに費やされた。自分の貯金も失っていく苛立ちの矛先、欲望を抑えられないふがいなさのはけ口が、家庭での暴力という形で現れた。何度か消費者金融の前でたたく日もあった。これではいけない、負け犬じゃないか、と自分を責めつつも、一発逆転を狙ってパチンコ台から離れることができなかった。

「こんなぐうたらな中年男の情けない話を聞いてもらってありがとうございます」最初の面談の終わりに父親は深々と頭を下げた。「あとは自分の問題ですから何とかします。妻にも娘に対しても、何とか：」という父親とはその後2回会った。普通に働いていた頃の自分を取り戻したい、営業の現場から離れて以降、誰とも話す機会がなかったのどんなことでもいいから話したい、という願いを受け入れた。「パチンコは完全には止められません。止めないといったほうが正しいでしょう。自制しながら続けることで、立ち直っていく自分を

見つめることができるのではないかと思つて。やっぱり甘いですか」と父親は苦笑しながら語った。「いいじゃないですか。それで」とわたしは受け入れた。

## 崩壊へ本当の問題点は家族同士の関係の中に

振り返ってみると、父親は誰かに助けを求めていたのではなかったのか。職場での立場が変わって収入も上がらなくなったことを妻に話せなかったことは、夫としてのプライドが邪魔したのかもしれない。素直に面談を受け入れたこと、淡々とパチンコにめり込んだ経緯を話してくれたこと、そして漠然としてはいるが、現実に向かつていこうという姿勢を見せたこと、などから父親の心情を察することができた。

家族というひとつのシステムが崩壊することを食い止めることができたのは、そのシステムの中に隠れていた回復力だった。今回の家族に接してみて、K子さんの働きがその役割を果たしたことが分かった。

家族の中の特定のメンバーである父親がパチンコ依存状態になっ

たことは確かに問題だった。だが、本当の問題点は家族同士の関係の中にあるという考え方が家族療法にある。家族ひとりの変化は家族システム全体に影響するという考えで、家族のすべての構成員に接していくことで打開の方向がかなり見えてくる。父親がパチンコにのめりこんで生活が破綻しかけていたが、家族全体の循環的因果関係という側面からアプローチしていくことで、家族の中から対処方法が現れてくることを示す事例だった。

### 柏木勇一（かしわざい ゆういち）

大学卒業後、会社勤務を経て、現在はEAP企業（Employee Assistance Program）でカウンセラー及び研修講師として活動。  
厚生省認定産業カウンセラー、キャリア・コンサルタント、家族相談士、交流分析士